

進化と文化とこころ：生物学的視点と社会的視点からこころを探る

平石 界 (安田女子大学講師)

■目的

人間存在を理解する上で、生物としての側面を無視することはできない。ヒトがヒトである上で、生まれ、育ち、食べ、眠り、時に病に伏し、子をなし、育て、そして死ぬといった事々が、大きな意味を持つことは議論をまたない。一方でヒトは、単に生まれ育ち死ぬだけの生物ではなく、多くの物事を他者から学び、多くの物事を他者に伝え、DNAに依存しない形で、生活上の重要な情報を伝達する、すなわち文化を持つ生物である。本研究プロジェクトは、生物としての人間と、文化的存在としての人間という2つの視点の融合を目指す。とは言っても、このような大きな問題意識に対して、一朝一夕に回答が得られるものではない。何よりもまず、生物的存在と文化的存在という、2つの側面を融合することの重要性が研究者間で共有されることが重要であろう。そのために本研究では特に「進化」と「文化」という視点を取りあげ、それぞれの視点から研究者間の学術的な交流を促進することを大きな目標として実施された。

■プロジェクトの第1の軸:共同講義

2010年度に続き、本プロジェクトは3つの軸により実施された。すなわち「共同講義」「研究会」そして「講演会」である。共同講義においては、本研究プロジェクトのメンバーである平石界と内田由紀子に、京都大学こころの未来研究センター長である吉川左紀子を加えた京都大学の全学向け教養講義と、平石界と内田由紀子、そして竹村幸祐による専門課程講義(京都大学総合人間学部)を開講した。詳細については、『こころの未来』第8号に掲載された、昨年度活動報告を参照されたい。

■プロジェクトの第2の軸:ワークショップ

科研費基盤(B)研究「コンテキストの高低という視点からみた西洋と東洋における認識の文化差についての研究」(研究代表者:山祐嗣大阪市立大学教授)との共催により、“Workshop on Evolution, Culture, and Reasoning”を2012年1月7日に開催した。発表者とタイトルは下記のとおりであった。Taro MURAKAMI (Kyushu University) *“How About This?” Contextual Inference About the Ambiguous Referent in Children*; Katsuhiko ISHIKAWA (Kyushu University), *Interpretations of Others’ Interactions of Request By 5- and 6-Year-Old Children: Effects of Syntactic and Pragmatic Cues*; Sachiko KIYOKAWA (Chubu University) *Cross Cultural Differences In Implicit Learning*; Hiroko NAKAMURA (Otsuma Women’s University) *Postal Address as an Assay of Cultural Cognition*; Kosuke TAKEMURA (Kyoto University) *Cooperation, Intergroup Competition, and Winner-Takes-All Society*; Yousuke OHTSUBO (Kobe University) *A Test of Costly Apology Model in Seven Cultures*.

またワークショップのうち、カナダのLakehead UniversityのLaurence Fiddick准教授による講演*A Modular Account of Open and Closed Societies*は一般公開された。加えてKansas State UniversityのGary Brase准教授がディスカッサントとして参加した。子どもによる心の理論の理解から、思考推論についての文化比較研究まで、活発な議論が行われた。進化心理学者であるFiddick博士が「閉じた社会と開いた社会」というテーマで講演を行ったことは、本プロジェクトの目的にとっても、大きな意味を持つものであった。講演原稿は、Fiddick博士の厚意に

より希望者に配布可能である(希望者は平石界 kaihiraishi@gmail.com まで)。

■プロジェクトの第3の軸:講演会

2回の研究会を開催した。アクティブな若手研究者の姿に、「進化」や「文化」というテーマに興味を持つ学部生が触れる機会を設けたいというねらいから、上記の京都大学総合人間学部における講義との併催という形をとった。第3回進化と文化とこころ研究会(2011年12月8日)では、広島大学の清水裕士氏を招き、「友情を支える適応論的メカニズム」というテーマで、進化生物学における一大理論である「互惠的利他主義」と「友情」という我々の日常を結びつける研究について、友情の普遍性と文化差についても触れつつ、講演していただいた。第4回研究会(2011年12月15日)は、神戸大学/日本学術振興会の三船恒裕氏に、「進化で解き明かす集団内利他行動」というテーマで、人間の大きな特徴である高い利他性・協力性の進化的起源についての様々な議論をまとめつつ、ご自身の行った内集団ひいきに関する実験について紹介いただいた。専門的な内容であったにもかかわらず、参加した学部生の反応も良く「進化と文化とこころ」というアプローチの未来に希望を持たせるものであった。

本プロジェクトの活動は2011年度をもって一応の終わりを見た。本プロジェクトが2010年度に行った文化系統学をテーマとした第2回ワークショップが、間接的な形とはいえ『文化系統学への招待』(中尾央・三中信宏編著、勁草書房)という形で2012年5月に出版されるなど、その成果は確実に形をなしつつある。今後も、プロジェクトの活動に参加した研究者間で、活発な交流が行われることを期待する。